



謹賀新年

年頭にあたってのご挨拶

理事長 金原 優



自然科学書協会の第六三期がスタートし、販売・出展、著作・出版権、研修、広報、総務の各専門委員会、ならびに税制・再販流通特別委員会の活動が始まりました。それぞれの委員会は各委員長の指揮のもとで、会員各社から選出された委員によって今期の具体的な行動目標を設定し、協会活動の活性化に向けて動き出しています。協会内外の関係各位におかれましてはそれぞれの立場でご協力をお願いいたします。

二〇一四年も明け、出版界は昨年からの未解決問題に積極的に取り組んでいかなければなりません。出版界全体としては「出版者の権利」、「特定秘密保護法」等出版活動に直接の影響を与える問題もありませんが、自然科学系の専門書にとっては更に別の大きな問題に取り組まなければなりません。「出版者の権利」問題

は専門書にとっても重要な問題ではあります。今回の問題の発端は一般書、それもコミック雑誌の海外における電子海賊版に対して出版社が一定の権利を得て侵害者に対抗するための手段として検討されているものであり、以前は別として海賊版問題の存在しない専門書にとっては直接の影響はありません。一般書は主として印税収入で生計を立てている著者によって執筆されており、出版契約も権利の移転・委託も専門書とは大きく異なります。著作者の考え、権利侵害に対抗する姿勢も専門書の著作者である研究者とは立場が異なり、少なくとも現在検討中の「出版者の権利」問題で議論されている内容は専門書には当てはまらないものです。

専門書にとって大きな問題はむしろ「出版の電子化」問題であり、自然科学書協会としてもこれまで以上に積極的に取り組む必要があります。ある団体の調査によると企業の約三分の一は既に紙媒体の出版物を電子化して社内でも共有利用しているという結果が出ています。出版社から直接許諾を得て電子化しているものもあるかも知れませんが、複製管理団体ではまだ電子化の許諾体制が整っていないことを考えると、この電子化複製の殆どは無許諾で行われていることになり

ます。問題は許諾の有無ではなく、利用者が出版物を電子化して利用したいという要望に対して出版界の対応が追い付いていないことにあります。自然科学系の専門

書は、それが書籍であれ雑誌であれ、利用者はその発行されている膨大な情報から自分の求める資料を探し出し、研究開発に役立てていかなければなりません。そのためには情報検索と保存・利用のシステムが必要であり、それは出版物を電子化することによってはじめて可能になります。専門書出版社としてはこういった電子出版と情報活用が可能になる方を提供していかねばなりません。その意味では利用者の方がはるかに先を行っており、我々出版社の対応が遅れているというのが現実です。

出版物の売上が減少傾向を示し始めて相当の年数が経過しました。専門書も例外ではなく、読者利用者の活字離れが顕著であるとされています。しかし本当は利用者は活字から離れているのではなく、活字を読む媒体が変化していることに過ぎないと思います。利用者は依然として情報は活字を通して得ており、それを伝える媒体が紙から電子に変化しただけなのでしよう。電子的な手法と情報提供によって必要とされる情報を確に利用者へ届けることは専門書にとって不可欠であり、それが日本の科学技術を支える柱になります。

今年四月には消費税が増税になり、出版物の販売にも影響が出るかも知れません。しかし出版社はそれ以上の商品を用意し、専門書の利便性と付加価値を高め、利用者が利用しやすい環境を整えることを目標として出版活動を継続して参ります。皆様のご支援をお願い申し上げます。

2014.1.15 NO.1

一般社団法人 自然科学書協会 | 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-101 | 神保町 101 ビル 1 階 | TEL 03-5577-6301 | <http://www.nspa.or.jp/>

## 自然科学書協会に期待すること

株式会社 新文化通信社  
代表取締役社長 丸島 基和



この業界には専門用語が多すぎます。そのなかには、一般に馴染みの少ない用語も多く、暗号のようなものさえあります。業界用語とは本来そうしたものが、経理・会計処理では、委託制度下における売上計上の考え方や延勘、常備寄託など、他業界にはない商慣習も少なくなく、金融機関に説明しても理解を得られないケースもあると聞きます。

また、その暗号のようなものも業界内で統一されていないことがあります。例えば、書店員が日常当たり前に用いている「客注」という言葉、これは取次会社には通用しません。流通取引上においてはあくまでも「注文」でしかないので、日書連と取次会社の間で、送返品同日精算問題の意見交換した席上、「言葉が通じません」と言い争ったという出来事は冗談にもなりません。

さらに新聞記者が会見で「正味や、取次会社ってなんですか」と聞いたことがあります。出版社の人は呆れた顔をし

ていましたが、それが一般的なのです。私自身も一般企業の方々から「出版・書店界は参入しにくい」と聞かされたことがありますが。それは、「特別な業界」という嫌味のニュアンスをもっていました。他業界から見ると排他的であると思われるように注意しなくてはいけないと思います。

「自然科学書」——この言葉からどんな本かをイメージすることは容易ではありません。日常的にもあまり使われていないように思うのですが、いかがでしょうか。

いま、若い人は活字や言葉を粗末にしています。難しい言葉より、感覚的な、まるで擬音のような言葉を使いたがる。そんな人が貴協会会員社の読者とも思えません。が、日常の生活や職場に即したやさしい名称であってほしいと感じる時があります。

書店店頭にある「人文書」というジャンルプレートも、その分類・カテゴリーをキチンと話せる書店員がいるのでしょうか。ましてその言葉そのものは読者に響きにくい。それが当たり前の時代になっているのです。

「新書」を新刊書と思い込んでいる人がいるのも事実。私の友人がそうでした。「ムック」、これを説明できる一般人もいないでしょう。業界用語と読者プロモーションの言葉が混在したり、業界の都合で読者に説明することも改めなければいけないと思うのです。

出版社の関心事には、いまもデジタル事業があります。「紙版で売れた本が売れる」という電子書籍の方程式は明確で

あり、紙版が売れなくても電子書籍で起死回生を図るといふ出版社の野望は、コミックやアダルト系が圧倒的なシェアを占める現実の前に、先細っているように見受けられます。

また、流通上格差のあった取次会社の条件も、デジタル事業においてはゼロベースからのスタートという観点で期待感が高まってもいいと思います。その詳細は各社、守秘義務契約から非公開ですが、失望する出版社も始まってきているのです。電子書籍の難しさは電子ストアに「埋もれて、読者が目的の本を見つけ出せない」こともあります。その対処法は値引きしかないというのも事実。「二巻無料」「九九円キャンペーン」「ポイント五〇倍」などの施策から電子ストアの「良い位置」を確保し、前面で告知するものです。安売りによる効果は数カ月間にわたり続くと言いますが、本に出会うきっかけが割引きでしかないというの寂しい気がします。

既に七二〇億円の市場が形成されているこの分野ですが、多くの出版社がビジネス化していくのは、まさにこれからです。人間同士、親交を深め一冊の本を拡売してきた出版社の営業にとって、電子ストアの促進は簡単ではなさそうです。専門書出版社のなかには、このデジタル事業のなかで、「専門書」という呼ばれ方を嫌う人もいます。「詳しく解説した実務書」だったり、「専門的に書いた実用書」という言葉を用いているようです。一般の読者に寄り添った言葉で、本を紹介しようとしているのです。ネットするなら、なおさらです。

自然科学書協会の皆様が、紙も電子も売れる時代を切り開き、発展されることを切に願っております。

## フランクフルトブックフェア報告

第六五回フランクフルトブックフェア（FBF）が、ブラジルをテーマ国として一〇月九日（水）～一三日（日）の会期でフランクフルトメッセ会場にて開催されました。例年通り、STM出版社は四号館に集中、日本会場の定位置となった六号館、英語圏出版社が集まる八号館と大きな変化はなく、それらの会場の人の動きから受けた印象も昨年に近いものでした。主催者発表による会期中入場者数は二七五、三四二人（昨年比六、四一人減）とのことですが、雨模様の日候もあり、土日の一般客が少なかったのかもしれない。

展示参加は百の国・地域から七、三〇〇社で、これは昨年と同様とのこと。日本からは三〇社三団体が出展、当協会では六号館の出版文化国際交流会と国際交流基金の日本共同ブースに、出版協会、大学出版部協会と共に一八の会員社から三三点を展示しました。期間中、数社の海外出版社が展示書目の翻訳に興味を示し、原書出版社に照会されています。

来年は、さらに多くの会員社からの出展が望まれます。会期後、展示出版物はサンクトペテルブルグの三笠宮文庫へ寄贈すべく手配が進められています。

インターネットで世界中からあらゆる情報が入手できる今、ブックフェアの持つ意味も年々変化しつつありますが、毎

年一回、世界中の出版界が何に注目して、どこを指しているのか、実際に観て、聴いて、空気に触れることが出来るこのフェアは、古今東西、老若男女、出版に携わる者にとって、なによりも刺激を得られる場であることに変わりありません。ともすれば、時代は書籍の電子化から電子出版物の書籍化へと、出版の基本形態自体が移りつつあるときえ感じられる昨今、次々と現れる出版界への新規参入者の存在がここFBFでも年毎に増してゆくのを感じます。出版社がしっかりと自らの立ち位置を確認・確保し、イニシアティブをもってそれを進歩発展させてゆかためにも、FBFの臨場感の中で得られるグローバルな生の情報と刺激は大いに役立つに違いないとの思いを新たにしました。



会場風景

(販売・出展委員会副委員長 竹生 修己)

## 国立国会図書館見学会報告

一月一四日午後二時半より会員社一八社二五名の参加をいただき、国会図書館利用者サービス部の吉間様アテンドのもと、国会図書館東京本館の見学会を開催しました。

まず講堂にて、資料デジタル化および図書館送信サービスについて電子情報部の樋口様にご講演いただきました。その後二グループに分かれ、来場者の閲覧状況や、複写申し込みと閲覧申し込みの様子、書庫からカウンターへの運搬状況などを見学しました。

その後メインイベントの書庫の見学へと向かいました。書庫はホコリや湿気など、外部からの雑菌を防ぐため靴カバーを装着しなければなりません。今回見学したのは新聞や雑誌を保管する新館の書庫で、先に最深部地下八階にある新聞の書庫を見学。全国紙はもとより、各地方版、地方紙、業界紙までありとあらゆる新聞が、かのウサイン・ボルトですら一二秒はかかるであろう一三〇メートル余に連なる書架に並ぶ様子はまさに圧巻でした。続いて地下一階の書庫へ移動。ここにはコミック誌から思いもよらないジャンルまで固定書架に並んでいました。予想だにしないタイトルを見かけるたびに、ありとあらゆる出版物を保管しているという国会図書館の一端を垣間見た気がしました。

一方、書籍はどのように保管されているかという点、書籍が保管されている本館書庫は、通路幅及び天井高など、見学者の安全面を考慮し公開はされていない

とのことで、わからずじまいでした。いつの日か書籍の保管状況も見られたらと思わずにはいられません。

余談ですが、国会内に存在する国会図書館の分室ですが、残念ながら一般には公開されていないとのことです。  
(次頁に続く)

### ■第六三期理事会・委員会開催一覽

(二〇一三年一月～二月)

#### ●理事会

・一月二一日(木) 一月定期理事会  
／一四時分～一五時一〇分 日本出版クラブ会館  
・二月五日(木) 二月定期理事会／一五時三〇分～一六時三〇分 東京會館

#### ●専門委員会

・一月一八日(月) 販売・出展委員会  
／一六時～一七時 文化産業信用組合  
・一月二九日(金) 総務委員会／一三時三〇分～一四時三〇分 協会事務所  
・二月一三日(金) 販売・出展委員会  
自然科学書フェア小委員会／一三時～一四時三〇分 文化産業信用組合

#### ■事務局だより

〈代表者・当会代表者変更〉

●株式会社 へるす出版  
代表者  
旧・岩井壽夫 新・長谷川恒夫  
当会代表者  
旧・岩井壽夫 新・長谷川潤

#### 〈当協会会員募集〉

自然科学書業界の健全な発展のために志を一にする会員を募集しております。詳細は、協会事務局 (sec@nspar.jp) までお問い合わせください。

### ■第六三期／第六期広報委員 〈担当常務理事〉

宮部信明(岩波書店)  
委員長 牛来真也(コロナ社)  
委員 吉原 隆(家の光協会)  
桑原正雄(岩波書店)

竹西素子(オーム社)  
稲沢 会(共立出版)  
矢吹俊吉(講談社サイエンスティフィク)  
大井隆之(コロナ社)  
遠矢良太郎(南江堂)  
増田素美(丸善出版)

#### 編集後記

以前、編集をしていたころは、研究の先端やホットなテーマを追いかけていたが、もうちょっと「楽しむ」ということを考えておけばよかった。テレビ番組「情熱大陸」で、プログラマー真鍋大度氏の活躍を見て、テクノロジーは楽しむものだ！と再認識させられた。顔認識システムを子ども向けエンターテインメントに利用したり、プロジェクトクションマッピングの技術を歌手のライブ演出に利用したり。テクノロジーって、物をつくるだけでなく、楽しみだけのために使ってもいい。

聴いている音楽もいわゆるテクノポップ中心でテクノロジーに満ちている。音は電子音、声を加工するのはあたりまえ、ボーカロイドなどというものもある。そうした音が聴いていて心地よいのはなぜか、いまならそんなテーマを企画にしたい。  
(M・K)



職員からの説明に聞き入る参加者たち

(前研修委員長 長 滋彦)

### 出版・印刷人の集い報告

一月二日(木)に第一六回出版・印刷人の集いが、東京都印刷工業組合出版メディア協議会主催、自然科学書協会と出版梓会の協賛で開催されました。

二部構成となっており、第一部は午後四時半から日本書籍出版協会の四階大会議室におきまして、日本書籍出版協会の専務理事の中町英樹氏による「いまこそ出版にマーケティングの発想を」と題して講演会が行われました。参加者一四八名(主催者発表)



中町英樹氏

第二部は、午後六時から会場を日本出版クラブ会館に移動しての懇親会となりました。主催者を代表して同協議会協長の山岡景仁氏(三美印刷)による開会の挨拶に始まり、協賛団体から当協会の金原優(医学書院)理事長の挨拶、出版梓会の井村寿人(勁草書房)理事長の乾杯の音頭の後、賑やかに歓談が行われました。途中恒例の豪華景品が当たる抽選会も行われました。中締めとして同協議会副協長の渡辺善広氏(壮光舎印刷)が挨拶に立ち、閉会となりました。

(広報委員会)

### 年末会員集会・懇親会報告

一月五日に東京會館において年末会員集会及び年末懇親会が開催されました。従来新年に行われていた会員集会の開催時期を繰り上げて行われた年末会員集

会(午後四時半)には、三六名が参加し、金原優理事長の挨拶に続き、五専門委員会及び税制・再販流通特別委員会の活動報告が行われました。中でも著作・出版権委員会、とりわけ現在喫緊の話題となっている電子書籍に対応した出版権の創設についての状況説明に、参加者は興味深く聞き入る姿がとて印象的でした。

引き続き午後六時よりゴールドルームに場所を移し行われた年末懇親会には、一五名のご来賓と当協会の相談役、会員社および事務局の九六名、合計一一一名が参加し賑々しく開催されました。

金原理事長の開会の辞に続き、一般社団法人日本書籍出版協会理事長の相賀昌宏様より「出版権については積み残しのなきよう継続の努力を続けるのでより関心を求めたい。また、児童書出版社を事例に、変化を面白がるのが重要であり、読者、版元、書店、販売会社、図書



相賀昌宏様



川上浩明様



本郷允彦 相談役



安西浩和様



後藤 武 理事



南條光章 専務理事



全体風景

館で知の再生産をしていこう」という主旨のご挨拶をいただきました。続いて日本出版販売株式会社の専務取締役安西浩和様、株式会社トーハンの専務取締役川上浩明様にご挨拶をいただきました。来賓のご紹介、後藤武理事への功労者表彰が行われた後、本郷允彦相談役による乾杯を合図に、会場のあちらこちらでは親睦を深めつつ出版状況の情報交換をする参加者の姿が見受けられました。大いに盛り上がった懇親会は、南條光章専務理事による中締めの挨拶と三本締めにより、暮れの和やかなひとときはお開きとなりました。

(総務委員長(司会兼務) 長 滋彦)

